

「利用者と介護者互いに負担をかけない移乗介助」

2年7組 8番 植 草 希

2年7組 17番 近藤 麗麻奈

実 習 施 設： さ く ら 館

<問題設定>

- ・移乗介助は、介助の中でも一番利用者の身体に触れる時間が多く、利用者の身体の状態について深く知ることができるのではと考えた。
- ・利用者に負担をかけないように、スムーズに行う方法を学びたかったから。
- ・拘縮の利用者の移乗で、注意する点を知りたかったから。
- ・移乗介助はボディメカニクスを活用しないと、腰を痛めやすいので痛めないような方法を知りたかったから。

<利用者の状態>

- ・Aさん 女性 全介助
- ・食事の時以外は、寝たきり
- ・体の動きが少なく、四肢の拘縮（特に腕の拘縮が強いので持ち上げにくい。）
- ・言葉は喋れない（喋りかけると口は動くので言葉の理解はあると考えられる。）

<援助方法>

- ①車椅子からベッドに移乗することを説明（反応は見られないので目を合わせ、介助することを理解してもらう。）
- ②ベッドの高さを調節する（頭側が上がっている場合は平面にする。）
→車椅子からベッドに移乗する際は、ベッドの高さを低くする。
- ③柵を取る。
- ④車椅子をベッドに近づけ、足側にセットし、位置を確認。（フットレストに足を引っ掛けないように置く）
- ⑤利用者の足を、フットレストから下ろす。
- ⑥利用者の体を、前かがみにする。（介護者は背中に手をかけて体重を後ろにかける。）
- ⑦腕がクロスして拘縮しているため、介護者は肘を片方ずつ上げて、脇に手を入れる。
→その際、背中で腕を組む。
- ⑧介護者は足を広げ、腰を落とす。
- ⑨利用者を自分の方に傾け、半円を描くように持ち上げる。
- ⑩ベッドに座らせた後、肩とひざ裏を持ち、臀部を支点にして体を回して寝かせる。
※食後は頭側を20度上げる。
- ⑪柵を戻す。
- ⑫気分の確認をする。

<利用者に負担をかけないために気を付けたこと>

持ち上げるときに、真っ直ぐ持ち上げようとするとうちあがらないので、自分のほうに傾け、半円を描くようにする。

＜ボディメカニクスを活用するために気を付けたこと＞
ベッドの高さを自分の行いやすい高さにし、足を広げ、腰を落とす。

＜拘縮の利用者の注意点＞

- ・脇に手を入れるときに片方ずつ肘を少しずつ持ち上げて素早く手を入れる。
- その時に洋服で摩擦が起きないように慎重に行う。
- ・クロスした手で自分の皮膚をひっかいてしまう場合があるので両手が洋服の上に乗っているか確認する。

＜考察＞

利用者の負担を減らすには、健常者と同様、座位から立ち上がる時の前かがみになる自然な動きを活用することが必要である。

また、介護者の負担を減らすためにベッドの高さを自分の行いやすいよう（腰の高さ程度）に変え、足を肩幅より少し広いくらいに広げ腰を落とすと職員の方から指導を受けた。

これは、介護者の腰を痛めないためにやる工夫であり、足を広げないと持ち上げるときに踏ん張れないし、体を思うように動かせない。ベッドの高さが低すぎると介護者の腰に負担がかかり、高すぎると介助が行いづらい。

拘縮している利用者は無理に動かそうとすると骨折や脱臼のリスクがあるので、肘や膝を動かすときは慎重に少しずつ動かす必要がある。

拘縮の症状は一人ひとり違い、Aさんの場合は腕の拘縮が強く、腕がクロスしている状態だったが、ほかの利用者を観察すると足の拘縮が強くベッドの柵に当たったりこれ以上進行しないようにクッションを挟んだりしている人や、腕の拘縮が強く脇に手を入れようとしてもなかなか入らない人などがいた。

介護者は一人ひとりの症状に合わせた介助を行う必要があると学んだ。

参考文献：<http://www.kaigoweb.com/>

利用者と介助者互いに 負担をかけない移乗介助

実習施設：特別養護老人ホームさくら館
2年7組 8番 植草希
17番 近藤麗麻奈



問題設定の理由

- 介助の中でも一番利用者の身体に触れる時間が多く、利用者の身体の状態について深く知りたかった。
- 利用者に負担をかけないようにスムーズに行う方法を学びたかったから。
- 拘縮の利用者の移乗で注意する点を知りたかったから。
- 移乗介助はボディメカニクスを活用しないと腰を痛めやすいので痛めないような方法を知りたかった。



利用者の状態

- Aさん 女性 全介助
- 食事のとき以外は、寝たきり
- 体の動きが少なく、四肢の拘縮がある。
- 言葉は喋れない。



援助方法

- ① 車椅子からベッドに移動することを説明。

ベッドに移りましょう♡



- ② ベッドの高さを調節。

- ③ 車椅子をベッドに近づけ、位置を確認。

- ④ 足をフットレストから降ろす。

- ⑤ 体を前かがみにする。



- ⑥ 肘を片方ずつ上げて脇に手を入れる。

- ⑦ 利用者を自分のほうに傾け、半円を描くようにして持ち上げる。

- ⑧ 肩と膝裏を持ち臀部を支点にして体をまわして寝かせる。



利用者に負担をかけないために気を付けたこと

→持ち上げるときに、真っ直ぐ持ち上げようとすると上げられないので自分のほうに傾け、半円を描くようにする。

ボディメカニクスを活用するために気を付けたこと

→ベッドの高さを自分の行いやすい高さにし、足を広げ腰を落とす。

拘縮の利用者の注意点

・脇に手を入れるときに片方ずつ肘を少しずつ持ち上げて素早く手を入れる。

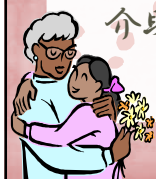
その時に洋服で摩擦が起きないように慎重に行う。

・クロスした手で自分の皮膚をひっかいてしまう場合があるので両手が洋服の上に乗っているか確認する。

考察

・利用者の負担を減らすには健常者と同様、座位から立ち上がる時の前かがみになる自然な動きを活用することが必要である。

・拘縮の症状は一人ひとりちがうため、介護者は一人ひとりの症状に合わせた介助を行う必要性があると学んだ。



御清聴ありがとうございました！

- お世話になった施設の職員の方々
- 利用者様方
- 先生方
- 一緒に頑張った2年7組のみんな

すべての方に感謝申し上げます♡

Thank you